

白紙余談

全国的に広がりをもよおす豪雨被害がもたらすさまざまな人間模様

◇未曾有の被害をすでに出しながら「令和2年7月豪雨」の猛威が未だ止まらない。7月12日現在、豪雨被害への新たな警報は九州から四国、中部、さらに東北地方にまで出ている。

◇そして当然のことだが、仮に豪雨のピークが過ぎたと思われる地域においても、被災からの復興はこれからの課題であり、まったく片は付いていない。そういう意味合いではそうした地域も現在進行形の被災地であることには変わりはない。さらに7月4日頃から豪雨に見舞われ続けてきた鹿児島県や熊本県などは、現時点でもさらなる豪雨への予報が消えていない。

◇こうした状況下では、被災地エリアの土木・建設・電設業者などは新たな被害への対処とともに、復興への準備を進めねばならない。自らが被災する危険性も含め、さぞかし心身の休まる暇もない日々だろう。

◇自らが被災するかもしれないという事例では、たとえば中部電力パワーグリッドの50歳代の配電作業員が、静岡県川根本町での土砂崩れによる倒木の撤去作業中に、何らかの理由で大木に当たり、死亡したという7月6日午後の事故などが想起される。

◇当日の現場付近は、倒木が電線に引っかかり、約40世帯で起きていた停電を復旧させるための作業が実施されていた。作業員は電線を繋ぐ前段階の倒木撤去作業の最中に不慮の事故に遭遇した。有事における電工さんはまさに命がけの仕事と、改めて思いが至る。

◇現代の暮らしは電気がすべてを制御している感がある。その分、電気の保守はかつてないほど重要な仕事

と化している。要請があればすぐに駆けつけねばならない責務をも負うことになる。まさに現代人の生活を守るための防人（さきもり）の仕事というしかない。

◇それは豪雨やそれに伴う河川の氾濫、土砂崩れなどさまざまな要因から引き起こされるネット回線の修復、電話回線の修復などに日常的に携わっている人々にも、同様のことがいえるだろう。

◇そういう時代だからこそ、通信や各種管工事なども含む広い意味での電気設備業者への需要は引きも切らない状況になっている。人間社会を維持するために絶対不可欠な仕事とは何かという定義に関しては、みる人の立場や価値観によってさまざまだろう。だが少なくとも電気・通信関連の保安に携わる仕事は、誰がみても、絶対不可欠な仕事だ。それは確かだろう。

◇そんなことを考えつつネット配信の地方の豪雨関連ニュースをみていたら、11日付けの心温まるNHKの記事があった。球磨川の氾濫で練習ができなくなった熊本・人吉の高校球児たちが臨時休校を活用してボランティアチームを結成、被災者宅の整理などの手伝いを行い、地域の人々から感謝されているという。

◇今夏の甲子園への夢は断たれてしまった高校球児たち。だが自分たちの無償の行為が地元の人々に及ぼす温かな影響力を実感することは、甲子園を目指すこととはまた違う生きがいの芽を見つけるヒントにもなるのではないだろうか。こういう機会に、そうした若者たちが電気の仕事の重要性にも興味を持ってくれればなどと考えると、我田引水が過ぎるだろうか。（E）